

早稻田學報

大正六年 第貳百七拾叁號 十一月十一日發行 每月一十號發行

本號目次

修學の三大要旨……………平沼理事

意見

校報

代表者の認可……天野維持員の辭任……講師囑託……教授會議
員囑任……教授講師及助教の辭任……理工科機械學科主任の
更迭……御大典紀念事業委員會長の更任……理事會例會日……職員
慰勞會の更迭……外交部及領事官試驗合格者……文官高等試驗合格者
館報告……理工科の修學旅行……早稻田工手學校の修學旅行……圖書
故角谷啓三君遺族の寄附

面影

校友……………外交官試驗合格……………井上留次郎氏

校友會報

校友會幹事會……校友辯護士受驗者懇親會……稻保會……辰政
俱樂部消息……大阪校友晚餐會……長崎校友有志會……京城校
友會……上毛校友會……新潟縣蒲原校友會……上海校友協議會
永井柳太郎君送別會……校友動靜

學生會合

稻保會成る……商科一年經濟學會讀書會成る……支那協會
基督教青年會……建築學科早苗會……早稻田鸚鵡會……東亞
俱樂部支那旅行記

運動

秋明水上運動大會の休止……庭球部全捷記……野球部消息……
教職員庭球俱樂部會計報告

雜報

大隈總長の歸京……大隈維持員の支那行……平沼教授
の地方講演……浮田教授令嬢の結婚……庭庫番人へ弔慰金を贈
る……東京風水害救済金募集報告……砂村小學校長よりの謝狀
……故角谷啓三君弔慰金報告……慘害の地を訪ねて

通信

瑞西便り……………中村萬吉氏……米國便り……………高橋清吾氏

東京牛込

早稻田大學校友會

電話番五〇〇三

東京八八九番口座

意見

修學の三大要旨

理事 文學士 平沼淑郎氏談

修學の目的は何に在るか、單に學校の課程を修了するを以て我が事足れりとするならば、修學はさまで困難なる者ではない。小學校から中學校、中學校から大學校へと順次登り行く事は、身體脆弱、癡癲白痴の人にあらざるよりは、誰も皆之を能くする事である。併しながら、之は唯外形の上に止まる事であつて、修學の目的は爾が淺薄なるものではないと思ふ。學を修めて而して達徳の士となる、是れ窮極の目的であると信ずるのである。聖人たらずとも聖賢に近づき得るのが修學の目的でなければならぬと思ふ。之を今日の言葉で言はゞ人格を修養して人の人たるべき資格を備ふる事が修學の目的でなければならぬと信ずるのである。而して此の目的を達するに當て、少くとも三つの肝要なる點があると思ふ。

したる後にあらざれば其の眞意を理解する能はざる事と思ふ。左右縦横より之を研究すると云ふは即ち廣く學ぶの意味で、此れを考へ彼れに照し、而して後始めて眞理の存する所を窺ひ得るのである。廣く學ばざれば意見狹隘に陥り、終に迂拙を免かれざる事となる。迂拙は即ち物に暗いと云ふ意味である物に暗いのは即ち廣く學ばざる故である。迂拙の人は事理に通ぜず、事態を辨ぜず、洵に笑ふべきの所作を爲す事が多い。

第二に廣く學ぶと雖も散漫に流るゝときは何等の效もない。唯幅員廣きのみにして何等蘊蓄する所がないのである。斯の如くんば、學問の用も亦甚だ少いものである。廣く學ぶと雖も其の知識に一貫の系統を保たしめなければ、何等得る所が無い。世に博覽強記の人は少くないが、唯材料を供給するに止まる者が多い。これは所謂迂儒である。迂儒は世用を爲すこと甚だ少い。絶對に用なしとは云はぬが、甚だ少いのである。例へば彼の工業にしても、之れに要する材料の供給なければ其の目的を達する能はざるが故に、材料供給者も必要に相違ないが、併し材料の供給は、工業完成の域に達する順序に過ぎないから、材料供給のみにて工業の目的を完成するとは云はれない。之れと同じく、知識の供給のみにて修學の目的を達する譯には行かない。然らば即ち如何なる事をすれば宜いか、審に之を研究することが肝要である。學び得た所の材料を腦中に藏めて、之れに對し審に思ひを致すこれ廣く學んだ後の一大要件である。斯くして、始めて學び得た所の材料に脈絡が通じて來る。脈絡通じて、茲に始めて活知識活學

問を生ずるのである。さもなければ、知識は徒らに散漫に流るるのみ、決して多大の効用を奏することは覺えない。

第三に、廣く學び審に思を致す事は學問を活學問にするの二大要件であるけれども、之れのみにて未だ足れりとする事が出来ないものである。若しこれのみにて止まるならば、世用を爲すこと決して多大なるを得まいと思ふ。何となれば、廣く學び、審に思ひ、知識に一貫の脈絡を通じ得たりとするも、これは唯自己の所有物たるに過ぎないのであつて、廣く世の用を爲すと云ふには、未だ以て足れりとすることを得ない。此の得たる所の者を篤實に實行するの志がなければならぬ。茲に故らに篤實の文字を用ひたのは意味のあることである。世には自己一身に廣く學び、審に思ふ者決して少くない。併しながら筆の人舌の人たるに止つて、忠實に之を實行する人は少きかの憾みがある。爾かするときは言行一致しない事が起る。言行の一致せざる者は篤行の人とは云はれない。篤行の人にして始めて學問が世用を爲すものと信ずる。言行不一致の如く世を欺く者は少い。之れ即ち、學ぶと雖も、之を行ふに忠實ならざるの致す所である。故に修學の第三の要件として篤行を擧げなければならぬのである。

抑々教育の目的は、大學にあれ、中學にあれ又小學にあれ、世用を爲さしむる事が根本主義たらざるを得ない。我が大學の如きも、模範國民の造就を教旨の一として居る。模範國民とは何であるか、國家に忠良なる臣民でなければならぬ。此の主義を標榜する人にして知識狹隘、研究未だ完からず、行ひ篤敬なら

ざる人あらば、これ決して國民の模範と稱すべきものではなからう。又忠良なる臣民と云ひ難い事は勿論である。故に茲に修學の三大要旨を掲げて以て學問の榮と爲さんことを希ふのである。

我が大學の課程は決して完全なりとは思はない。之を改善するの餘地は尙ほ存すと思ふ。然れども、これ學科課程である。尙ほより以上に心得ざる要件がある。此の要件を胸中に蓄へて、而して修學に従はざれば、學び得た所の者は効用甚だ少きものと見なければならぬのである。夫れ故に我が學園に遊ぶ諸子の如きは、單に學科課程を終了するを以て能事終れりとしてはならぬ。愈々益々進んで之を大成するの覺悟あらまほしく思ふ。然らずんば、大學に幾多の星霜を積んで、學科課程を修むると雖も、俗人と選ぶこと遠からざるの憾みを生ずるであらう。大學の卒業生たる者は、少くとも凡俗に超越するの人たるを要するのである。凡俗の誘惑に陥らず、達徳の士たるに近づかなければならぬ。仍て茲に一言するのである。

校報

●代表者の認可 理事の互選に依り平沼理事本大學代表者となりたるに依り、曩に文部大臣へ右認可願出で置きたる所、十月廿四日東京府經由右認可書到達せり。
●天野維持員の辭任 法學博士天野爲之氏は今回終身維持員、講師及教授會議員を辭任せられたり。

●講師囑託 今回左記講師を増聘し、頭書の學科擔任を囑託せり。

法律哲學 法學博士 寬 克彦氏

西洋哲學 文學士 石原 謙氏

電氣工學 工學士 鯨井恒太郎氏

英語 文學士 木村 久一氏

英語 內山 常治氏

●教授會議員囑託 今回講師理工科應用化學科主任河合勇氏に教授會議員を囑託せり。

●教授淺川榮次郎氏、講師三浦信三氏、講師瀧脇重治氏、助教授土居寬通氏辭任せられたり。

●理工科機械學科主任の更迭 教授理工科機械學科主任工學士男爵福原俊九氏教授及學科主任辭任の上講師就任に就き、理工科科長工學博士淺野應輔氏更りて該主任事務取扱に就任せられたり。

●御大典紀念事業委員長の更迭 御大典紀念事業委員長市島謙吉氏辭任に付き代表者理事平沼淑郎氏更任該委員長に就任せられたり。

●柔道部長囑託 今回教授氏家謙曹氏に體育部柔道部長を囑託せり。

●弓術部師範の更迭 曩に弓術部主任尾崎清裕氏逝去せられたるに依り、後任として浦上榮氏に該師範を囑託せり。

●體育部各部長會 十月廿七日正午より體育部各部長會を開き、野球部長安部磯雄、短艇部長鹽澤昌貞、庭球部長高杉瀧藏、劍道部長中島半次郎、弓術部長平沼淑郎、角力部長内ヶ崎作三郎諸氏來會。左の體育部委員規程を協議決定の上散會せり。

體育部委員規程

第一條 體育部に委員若干名を置く
第二條 各部委員は其部長及師範の命令に従ひ其部の事務を掌る

第三條 各部委員は品行學業技術共に部長及師範に於て適當と認めたるもの、中に就き毎學年の始其部長の意見に由り選舉又は指名によりて之を選出す

第四條 左の事項に該當したるものは委員に選出することを得ず
一、教場の出缺常ならざるもの
一、不都合の行爲ありて譴責又は處罰を受けたるもの

一、前學年に於て原級に止りたるもの
第五條 各部は其選出したる委員の氏名を學生課を経て理事に届出づべし

第六條 各部委員は理事之を任命す
第七條 委員の任期は壹箇年とす、但再選することを得

第八條 一部の委員は他部の委員を兼ねることを得ず
第九條 委員は常に部員の名簿及部務に關する記録を調製し置き、毎年六月二十日を限り庶務會計の狀況を部長及學生課を経て理事に届出づべし

理事會例會日 理事會例會は自今毎週火曜日の兩日後開會の事となれり。
職員慰勞會 本大學創立を紀念せん爲め、其の紀念日たる十月二十日午後三時第二十教室に於いて職員慰勞會を開く。平沼、吉田、德永、宮田、内ヶ崎五理事を始め前田幹事以下職員一同出席。席上平沼理事より

本年は恰も本大學創立三十五年に相當するを以て豫て其の祝賀式舉行の企てもありしけど、折柄大隈總長御病氣に依り舉行の場合に至らず。又從來は毎年學長邸に於いて本日の創立紀念日を紀念せん爲め園遊會が催されて祝意を表する事となり居りたるが、本年は御承知の思はしき紛擾事件の爲め、目下學長も置かれざる爲め、夫れも叶はぬ次第にて、誠に物足りぬ心地がせられて、殺風景の感を免がれない。

翻つて思ふに是れ本大學に取りては誠に大切な時期であつて、吾人同人は一同緊要一番大に奮勵すべき時であると思ふが故に、此の際諸君倍奮の努力勤勉を切望せざるを得ない。云々。
の趣旨なる挨拶あり。一同食卓に就き和氣霽々歡談の裡に晚餐を供にして散會せり。

●外交官及領事官試驗合格者 本大學出身にして本年施行せられたる第二十六回外交官及領事官試驗に合格せる者左の如し。
明治三十一年 邦語政治科得業 井上留治郎

●文官高等試驗合格者 本大學出身者にして本年施行せられたる文官高等試驗に合格せる者左の如し。
大正四年 大學部政治經濟學科得業 大磐 誠 三

●理工科の修學旅行 理工科機械工學科三年生三十名は十月十九日助教山内弘、阿部秀磨兩氏引率の下に出發。足尾鐵山精鍊所並に日光電氣精鍊所を見學し、二十一日歸京せり。

●早稻田工手學校の修學旅行 早稻田工手學校電工科生徒三十九名は十月二十日講師竹内順三郎氏引率の下に出發。同日日光中禪寺清瀧の精鍊所を見學し、翌二十一日細尾發電所を見學歸京せり。

又同校土木課生徒二十二名は十月二十七日講師小野基樹氏引率の下に出發。玉川上流小丹波に於ける東京市水道局の流量測定を見學し

を紀念せん爲め園遊會が催されて祝意を表する事となり居りたるが、本年は御承知の思はしき紛擾事件の爲め、目下學長も置かれざる爲め、夫れも叶はぬ次第にて、誠に物足りぬ心地がせられて、殺風景の感を免がれない。

翻つて思ふに是れ本大學に取りては誠に大切な時期であつて、吾人同人は一同緊要一番大に奮勵すべき時であると思ふが故に、此の際諸君倍奮の努力勤勉を切望せざるを得ない。云々。
の趣旨なる挨拶あり。一同食卓に就き和氣霽々歡談の裡に晚餐を供にして散會せり。

●外交官及領事官試驗合格者 本大學出身にして本年施行せられたる第二十六回外交官及領事官試驗に合格せる者左の如し。
明治三十一年 邦語政治科得業 井上留治郎

●文官高等試驗合格者 本大學出身者にして本年施行せられたる文官高等試驗に合格せる者左の如し。
大正四年 大學部政治經濟學科得業 大磐 誠 三

●理工科の修學旅行 理工科機械工學科三年生三十名は十月十九日助教山内弘、阿部秀磨兩氏引率の下に出發。足尾鐵山精鍊所並に日光電氣精鍊所を見學し、二十一日歸京せり。

●早稻田工手學校の修學旅行 早稻田工手學校電工科生徒三十九名は十月二十日講師竹内順三郎氏引率の下に出發。同日日光中禪寺清瀧の精鍊所を見學し、翌二十一日細尾發電所を見學歸京せり。

又同校土木課生徒二十二名は十月二十七日講師小野基樹氏引率の下に出發。玉川上流小丹波に於ける東京市水道局の流量測定を見學し

●圖書館報告

●閱覽人員及貸出圖書數 本館九月分閱覽統計左の如し。

開館日數		人員		貸出圖書數	
種別		人員		貸出圖書數	
學生貸出		四、四〇六		八、九五〇	
特別貸出		七四		三〇二	
館外貸出		一四〇		二、〇八一	
公衆貸出		一九六		六二四	
合計		四、八一六		一一、九五七	
一日平均		一七八・三七		四四二・八五	

●圖書新加月報 本號九月新加圖書は總計四百二十一部七百三十九冊にして、内洋書百五部百三十六冊和漢書三百六十六部六百三冊なり之を細別すれば左の如し。

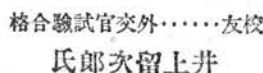
洋書之部

部	門	部數	冊數	寄贈	合計
宗	史	4	1	4	8
美	理	1	4	9	2
社	倫	2	2	1	2
理	育	1	2	11	16
心	行	2	11	18	15
教	學	2	1	4	2
地	政	1	2	1	4
語	治	2	1	1	4
文	學	1	2	1	4
經	政	1	2	1	4
政	治	1	2	1	4
哲	學	1	2	1	4
法	學	1	2	1	4
曆	史	1	2	1	4
部	計	4	1	4	8
部	計	5	1	4	9
部	計	1	1	5	2
部	計	1	1	20	2
部	計	4	1	4	13
部	計	5	1	4	29

和漢書之部

[illegible]

大暴風雨の際、高等豫科生角谷啓三君の痛ましくも慘死せられたる事は前號既に記載せる所なるが、今回同君遺族より、永く同君の在學を記念せん爲め、在學中其の屬せる理工科豫科の器具購入費として金五拾圓を寄附せられたり。



面影

本年施行の外、外交官試験に合格された校友井上留次郎氏を高田羅司ヶ谷の寓居に訪ひ、刺を通ずれば早速こちらへと案内されたは、氏の居間兼書齋と見ゆる一室であつた。寒暄一揖の後ち、と見る居宅は四五間もあらんかと見ゆるに、主人公たる氏の外、人の氣もなく、至つて物靜かなれば、餘所ながら御家族はと問へば、笑ひながら

一人

ですと無造作に言ひ放たる。

イヤ全くの一人です
と簡単である。仍てよく承はれば、氏は明治三十一年邦語政治料を出られてから十九年を経つた今日まで妻帯せられたこともなく、ズツト獨身生活

を續けられ、今日尙ほ勉強の爲め静閑な場所を好ま
るゝ所から、此處雜司ヶ谷に一月を構へ居らるゝに
拘はらず、下婢も使はれば、書生も置かず、食事は
親切な大屋さんに頼んで三食とも運んで貰ひ、勉強
専念に簡易生活を送つて居らるゝのださうであ
る。して、此の間明治三十二年に今日の高等豫科の
前身とも云ふべき英語學部を卒業以來、或は早稻田
大學出の編輯員となり、或は高等豫科主事として
教務に従事し或は寄宿舎長として學生を監督し、或
は文明協會の翻譯を爲すなど、常に比較的勉學修養
に縁近き職務に従事する傍ら、絶えず實用英語の研
究に努力傾注し、以て外交官受験の準備に勤められ
たさうである。氏の今日ある決して偶然でないこと
が了解せられた。

そこで、來意を述べて何か御感想でもと切り出せば、何も話す程の事もないが、是れまで自分の経験した外交官受験の心得とでも云ふ様な事に就いて心付いた二三を御話すことにしよう、若し批校學生諸君の參考に資するを得ば幸であるとの冒頭に

別れて居る。

第一段　は論文試験であつて、本年は六月廿日頃に官報で發表されたが、問題は船舶の敵性を論ず」と云ふ願であつた。

論文は、たゞ國際上の問題が普通であるから、國際公法私法に關する内外の著書を研究して、相當の見識を養ひ置き、自ら外交官として權輿折衝するの氣分を以て堂々と立論するものが肝要である。茲に細事ではあるが、一寸注意して置きたいとは、論文は十行十二字詰十五枚以下とある十五枚を十五頁と勘違ひをして飛んだ失敗をやる驗しのあることである。論文試験は論文の外に履歷書の英譯があるが、これは自ら型があつて、此の型さへ

呑込め様タイした事はないのである。論文履歴書
共に先づ邦文で作つて之を英譯するが、便利であ
る。論文試験に及第すると、

第二段 第一次試験に出頭せよとの通知が試験施行前三日位に来る。第一次試験は主として英語の試験であつて、課目は作文、譯讀、書取、及其の翻譯並に讀方、會話等であるが、此の試験はあらゆる方面から英語の力を試みるのであるから、讀む事、書く事、話す事、の三方面に平均的實力を養ふ事が必要である。一方に秀づるも他方に足りぬ所があるといふ様な行方方は不利である。だが、最も注意を要すべきは作文であらうと思はる。作文は普通突飛な問題を出して受験者の實力殊に應用の力を試みる傾向があるから、此の突飛の試みに面食はぬ様に用心することが肝要である。今年の作文題は、「中立國に駐在する帝國使臣より敵國情勢に關し外務大臣に報告するに擬するの文」であつた。此の第一次試験に應ずる平生の心掛けとしては、絶えず、海外電報、及外交上の記事報道等に注意する事が必要である。作文、譯讀、會話、書取等の問題は、是等に關する事が多いからである。

此等課目の外、口述要領筆記、公文摘要等があるが、是れ亦相當の注意を要するのである。

第一次試験に及第すると、第二次試験に出頭せよとの通知が、試験前四五日位に来る。

第三段、に當る、第二次試験は、筆記試験と口述試験の二様に別れて居つて、筆記試験に及第した後、更に口述試験を受けるのである。

第二次筆記試験は謂はゞ専門學術試験であつて、國際公法、國際私法、經濟學、憲法の正科四課目の外に選擇科目二課目、合して六課目である。口述試験の課目は筆記試験と同じ課目に就き試験せらるゝのであるが、筆記試験と口述試験とは之を受くるに於いて多少違つた所に骨のあ

ることを知らねばならない。例へば、筆記試験にあつては課せらるる科目に就いて基礎根柢たるべき實力を要することは勿論であるが、實力以外若し試験委員の該科目に關する著書論文等あらば、之れに一應眼を透して置く事が利益である。又選擇科目を選擇するに當りては、之れが標準を自己の得意に置くべきは通則であると同時に、課目の範圍及當該試験委員の如何等を參酌して之を決定することが便益である。

然るに口述試験にあつては、主として頭腦の働きを試みることとなつて居るから、實力以外煩智機才を練り置く事が必要である。平生此の機才煩智を練り置き、試験委員の難問追窮に對し、明快機敏の答を所謂流るるが如く聲に應じて與ふると云ふ事に平生心掛け居るが好い。云々。

述べ去り述べ來つて、尙ほ感慨深き面地にて、元來、外交官及領事官試験を受ける第一の要件は規則的教育を受けるにあるのに、不規則な教育を受けた自分が中途此の受験に志して、補填又補填その足らざるを補ひ來つた苦心忍耐は随分なまつたものでなかつた。

校友會報

●校友會幹事會 十月五日午後五時麴町區内幸町早稻田俱樂部に於て校友會幹事會を開き平沼理事出席、學校問題に就き經過の報告を爲し、同八時過散會せり、出席の幹事諸氏左の如し。

高木守三郎 石井 政吉 田中小太郎
前田 多藏 大橋 誠一 磯部倫一郎
鈴木佐平次 小汀 利得 川口 潔

●校友辯護士試驗受驗者懇親會 九月廿九日試驗終了當日午前十一時より日比谷公園松本樓に於て試験の慰勞を兼ね有志の懇親會を開く。在京校友を中心に地方校友、在學生來會せるもの貳拾一名。發起人の開會の辭に次で小山晉氏の南滿鐵道在職中の所感及校友の發展狀況の報告、其他の受驗者各自の談論風發氣焔當るべからざる者あり。其間美妓の酒間を幹旋するあり。歡聲湧くが如く、宴正に酣らんとする頃、政友會所屬代議士遠藤氏の來會あり。一層の盛會を極め、時の移るを知らず。大に飲み又談じ早稻田式を發揮して遺憾なし。最後に發起人の發議にて毎年受驗者相會する毎に大懇親會を開催する事を決議し、終りに校歌を奏し早稻田大學萬歳を三唱し、各自十二分の歡を盡して散會せり。時正に四時半、出席者氏名左の如し。(順序不同)(發起人川合報)

小山 晉 安東 吉郎 星野 寅次
泰野 武記 北村 猪八 田中 義次
中野 作樂 末田 傳雄 遠藤 金吉
伊達 光美 橋本 正 嵯峨 時司
藤原 藤作 甲村 信一 川合 安朗

以上校友
渡邊 聖男 河野 均平 池田 直助
米村嘉一郎 須佐 某 外一名不明
以上學生

●稻保會 十月十二日午後五時稻保會第十一回を神田小川町ときわに於て開催す。天高くして馬肥ゆるの好季、恰も内外火災保險會社協定料率は實施せられたり之れが恪守と其權威とを損ふ事なくんば事業の發達と共に世人は確實なる保險の保障を得べし。鈴木幹事茲

に開會の挨拶と同時に益々隆盛に至りたる本會の今昔に付て深き感想を演べ、研修の範圍愈々多きを加ふるの秋、新進の士に待つ所更に大なるを訴ふ。會長栗津博士は生存競争の劇甚なる刻下文物の開明進歩に比し而かも損害保險事業の如き未だ舊套を脱せざるの憾ありとて之れが刷新の要を説かれ、吾人の努力を自覺せしむるべく指導懇熱なり。東京火災理事新井智三郎氏は協定料率の實施と其の維持方に付て并に外國會社に對する再保險關係に付て談あり。小澤氏の保險從業員人物拂底論に次で、各員の五分演説あり。意氣旺盛杯盤の裡、歡談俄かに盡くべくもあらず。即ち校歌を合唱して散會したるは午後十時。(幹事報當日の出席者は、栗津博士(會長)新井智三郎(東京)西岡秀之助、中江爲之、高杉常市、村尾知義、野中伸太郎、(明治)諏訪部顯、佐々木惣次郎(東京)倉田信治郎、武井正房、梅津庸(上海)瀧川三郎、田島一郎(ニッポン)丸尾松藏、宇田川政吉(豐國)大崎八郎(大阪)吉澤清、木村重雄、星野德太郎(日章)横山賀利、渡邊忠成、小川澤増太郎、鈴木瀬平(日本)の二十四名とす、

因に會員大濱龜太郎氏は横濱火災を辭し關東廣曹會社へ榮轉、喜多國護郎氏は福壽火災仙臺社となりたり。

辰政俱樂部消息

●九月例會 九月十二日午後六時内幸町早稻田俱樂部樓上に定例茶話會を開き、各自意見の交換を爲し同十時散會せり。當夜の出席者左の如し。

田中啓次郎 岡田 稔 江原 憲吉
尾立 維昌 太田 守男
●十月例會 十月十日午後六時より早稻田俱樂部にて開會。談笑の間に友情の拘すべきあり。俱樂部の發展及資金募集方法に關し種々評議を重ね、同十一時散會したるが、當夜の出席者左の如し。

楠瀬 壽 永井 助藏 田中啓次郎
江原 憲吉 喜多 一重 徳永 眞鑑
太田 守男
●部員諸君に告ぐ 例會には別に案内狀を差上げ申さず候間部員諸君は毎月第二水曜日午後六時を期し内幸町早稻田俱樂部迄御光來煩はし度く希望仕候 幹事敬白

●大阪校友晚餐會 十月十九日午後六時より鶴屋に於て田中唯一郎氏朝鮮よりの途次立寄られたるを機とし、急に有志晚餐會を催したるが、出席は小川爲次郎、砂山雄峻、金澤種次郎、岸本市太郎、中井準太、鈴木茂雄、山口藤次郎、石原善三郎、丸山幹治、早瀬太郎三郎、伊藤孫作、西尾謙吉、廣海渡源之助、原田駒之助等の諸氏にて、談笑湧くが如く歡を竭して散會せり。

●長崎校友有志會 十月六日午後六時より内外クラブに於て日清生命保險の用務を帶びて來崎したる田中唯一郎氏の爲め小宴を張りたり。當番幹事田中直治氏の開會辭ありて後ち田中氏の謝辭あり。和氣霽々裡に十時過散會せり。出席者は小川寅六、平田龜之助、中津海知幾、松尾長市、松尾榮三郎、田中直治、森七郎、久保義美、吉田淳一郎、秋根昌雄の校友諸氏にて、外に有地伊吉、藤原八五郎、鎌先清太郎、邊渡熊太郎、石田昇、中山貞次郎

上野豐太郎、小島武嗣、山下幸吉、田川源藏、西村治八、陣内多三、大澤梅吉、田添猿松等の有志諸氏なりき。

●京城校友會 十月十三日午後五時より京城ホテルに於て臨時校友會を催し、初めて來遊せられたる田中唯一郎氏を歓迎せり。來會員は川上常郎、牧山耕藏、權藤四郎介、朝倉外茂鐵、板橋菊松、古城龜之助、德田高二、澁田茂太、丸山宗次郎、有馬純吉、横田龍三郎、鈴木長次郎、西田常三郎、福原喜八、松崎直治、甘樂辨治郎、有賀啓太郎、横尾信一郎、大西義夫、奥田直毅、藤間治郎作、中島司、關野善郎、熊谷英夫、其他の諸氏にて、席定まるや權藤氏歡迎の詞を述べ、尋で田中氏は謝辭に加へて過去に於ける大學經營に關しての詳況を報告し、主客懷舊談に時を移して散會せり。又十四日新義州在住の校友櫻井文太郎、小林昶、西村清其他の諸氏は午後六時より綠屋に小宴を開き、田中氏遠來の勞を犒ひたりと云ふ。

●上毛校友會 十月廿四日午後四時、市内曲輪町赤城亭に於て例會を開く。金庭友八廣神定五郎松澤知司清水留三郎平井曉村小柴奚三篠原秀吉外卅餘名參會し、本縣評議員改選に當り、校友二百六名に達したるを以て評議員一名を増員し、金庭友八松澤知司兩氏を選出する事に決し、更に本會擴張の爲め從來幹事松田謹一郎篠原秀吉二氏の外各部に互り左の諸氏を幹事に囑托し、母校問題の報告其他あり。酒間十二分の歡を盡して七時半散會せり。

妻 ●吉田吉太郎(確氷) ●佐俣宗三郎(北甘) ●小柴奚三(多野) ●新瀉縣蒲原校友會 今回鹽野谷清次郎、黒川詮亮兩氏の發起に依り、三條、燕兩町を中心とする校友會發起せられたる所、是れ從前より南西兩蒲原郡在住校友の宿望に投ずるの企てなりしかば、所在の校友相呼應して成るの勢にて、九月三十日、その發會式を三條町二洲樓に舉げたり。新瀉より松井母校評議員臨席せられ、母校の騷擾事件に就き細大談話せらる、所あり。後ち宴に移り、快談痛飲大に早稻田式を發揮し、十二分の歡を盡して夕刻散會せり。出席左の如し。(原生)

爲め、十月十七日午後五時より麴町區八重洲町中央亭にて送別會を開いた。集まる人々、主客併せて三十四名。一同食卓に着き、デザート、コースに入るや、大山郁夫君は主人側を代表し、懇切丁寧なる送別の辭を述べ、之れに對し永井君は極めて謙遜な言葉で觀衆の目的と、深謝の辭とを開陳した。宴を撤してから、一同別室に於て、胸襟を披き、大に談じ大に語り、霽々たる和氣堂に満つるの頃散會した。時に午後九時過であつた。殊に同夜出席した人々の内には、過般母校紛擾の際、兩派に分れて鎗を倒られた方々もあつたが、流石は同窓生の會合で、人をして母校に紛擾ありしや否やを疑はしむるまでに、親密に、且つ意思の疏通を見るに至つた。永井君の送別會が同君を送別する外に、意外の副産物を齎したのは、發起人一同の大に愉快とする所である。出席は主賓永井柳太郎氏の外左の諸氏であつた。(幹事報)

近藤 乙吉 増田 義一 宮川鐵次郎
齋藤 隆夫 井上 雅二 石橋 湛山
島田延次郎 筑紫 富雄 鈴木 謙
降旗元太郎 後藤 信治 佐藤 正
相馬 由也 佐藤 元郎 堤 康次郎
中野 勇平 森 盛一郎 東 則明
井上 忻治 原口竹次郎 早川 徳次
堀部久太郎 西岡竹次郎 宮島 綱男
橋 靜二 小山 谷藏 菊池 茂
三木 武吉 堀川 直吉 小山 東助
大山 郁夫 名取 夏司 井岸 繼志

●新井練三(4大政) 農商務省海外實業練習生と

なる (Caixa do Correio 1246, Rio de Janeiro, Brazil, c/o Nippon Hoyoki Kaisha.)

●白水 勇(6政) 大阪市高麗橋三越大阪市内に轉勤

●農村 與(6大政) 大阪市東區今橋二丁目三十三、國光生命保險相互會社大阪支部勤務

●丹尾磯之助(6政) 古河合名會社經理課勤務(麴町區飯田町六ノ一七加賀政雄方)

●瀧山良一(三七英政) 大阪市役所主事

●矢崎約三(6政) 古河合名會社に入る(牛込區矢來町三舊殿二十號)

●生島勝一(3政) 芝區琴平町七松屋文房具店を經營す

●赤木龜一(三五英政) 岡山縣選出衆議院議員補缺當選す

●森田 久(4政) 大阪朝日新聞社編輯部に轉ず(同社内)

●毛利英藏(3政) 大阪市西區立賣堀南通第四百十七銀行支店勤務

●崎山刀太郎(三六英政) 兵庫縣尼崎市古河合名會社尼崎工場勤務

●眞田 武(四五政) 大阪市東區北濱五丁目住友銀行に轉勤

●清水平治(三九大政) 大阪市南區惠美須町一丁目九百七番地ノ二浮田裝電社常務取締役

●亥角仲藏(三五政) 鳥取縣內務部長に轉任

●小池輝男(6政) 白木屋吳服店に入る

●菊池哲春(6大政) 古河合名會社調査課勤務(市外澁谷町下澁谷三一五武市方)

●小林平治(6大政) 內閣官署(淺草區東三筋町六十一番地)

●廣瀬安太郎(三八大政) 中日合辦鞍山鐵礦振興公司に入る(大連市淡路町中號地二十二番地)

●北澤平藏(2大政) 日本橋區兜町五番地日本商事會社に入る(市外西大久保四〇二)

校友動靜

●島村茂雄(二〇政) 山口縣厚狹郡須惠村字部族礦株式會社勤務

●中村 鶴(四三大政) 秋田縣河邊郡長に轉任

●佐藤七郎(五大政) 福井市福井日報主筆となる

●川久保嘉八(四一政) 佐賀縣松島郡山口驛農商銀行山口支店勤務

●長 龜男(四大政) 岡山縣小田郡神島外村大阪亞鉛鐵業株式會社神島製煉工場庶務係となる

●渡邊 淳(四二大政) 麴町區八重洲町一ノ一内田商事株式會社東京支店營業部長となる(市外集鴨駒込一五七)

●名久井石磨(六法) 函館區北海新聞社勤務

●藤本 守(六法) 研究科に入る(牛込區富久町一四藤本中)

●大屋善次郎(三四法) 名古屋市中區中市町佐治春藏本店勤務

●林 茂(三大法) 株式會社神戸製鋼所内播磨探鐵株式會社に轉任(神戸市多聞通二ノ一三八)

●岸 節造(四二大政) 日本橋區瀬戸物町東京古河銀行勤務

●檀 廣樂(六法) 三菱合資會社查業部勤務(小石川水道端二ノ三七羽野方)

●若松右三(六法) 大連市山縣通合資會社加藤洋行大連支店勤務

●天滿善次郎(四五大政) 滿洲大連朝鮮銀行支店に轉勤

●喜多國護郎(二大政) 福壽火災保險株式會社仙臺支部長に轉勤(仙臺市國分町五ノ一八〇)

●渡邊喜徳(四五法) 日清生命保險株式會社勤務

●河野乙三(三八大政) 京都市下京稅務署長に補せらる

●末田倬雄(六法) 廣島縣屬となる(廣島市白島中町警第六九號)

●土肥政勝(六大文) 山口縣山口町私立鴻城中學校在勤

●長谷川端圭(三七文) 茨城縣立太田中學校辭任 群馬縣山田郡毛里田村に歸住

●兵頭貞武(三大文) 東京電氣株式會社經理部調査課に轉勤(荏原郡入新井村新井宿九百三十九番地唐戸方)

●廣瀬作三郎(六大政) 橫濱市山下町五〇大阪商船株式會社橫濱支店に轉勤

●北川圭吉(三大政) 神戸市東神倉庫神戸支店輸出係

●江守 昭(六大政) 岡山縣倉敷町倉敷紡績株式會社本店人事課勤務(同町旭町七〇三ノ二)

●今井五六(六大政) 武州熊谷町石原片倉組石原製絲所勤務

●野末要三郎(五大政) 竹内鐵業會社小松鐵工所を辭し三重縣一志郡久居町に歸住

●澁澤音吉(六大政) 内田商事株式會社東京支店秘書掛(芝區三田臺町一ノ二八)

●海老原 建(四五大政) 京橋區月島東海岸通一ノ八に於て東京紙絲製造所を經營す(府下西多摩郡青梅町四分一三)

●本間義一(四五大政) 沖電氣株式會社に轉勤(市外上澁谷二四)

●橋 繁三(六大政) 橫濱市神天通三丁目株式會社藤松組に入る(同市委見町一ノ六富士館内)

●大橋 昇(五大政) 増田合名會社神戸支店に赴任(神戸市兵庫港三丁目二番屋敷森忠次郎方)

●武田鼎一(四〇大政) 大阪市西區立賣堀北通六丁目廿七番地株式會社旭造船所常務取締役

●戸坂隆吉(四三大政) 門司市外大里町日本金屬株式會社大里製鍊所主任

●加藤幸治(六大政) 岐阜縣吉城郡船津町三井礦山事務所勤務

●馬場小太郎(四三大政) 臺灣臺中廳潭仔墘臺灣驛傳社潭仔現出張所長に轉任

●井出久一(二大政) 北海道空知郡歌志内村上歌志内炭礦を辭し麴町區飯田町六ノ二四に居住

●榎 要(四三大政) 大阪市浪華造船鐵工所に轉勤(同市北區上福島北一丁目一六〇小池方)

●會田彰誠(四三大政) 本所柳原三ノ一五古河合名會社本所工場勤務

●立田純一(四五大政) 大阪市北區中三島五丁目大阪電燈株式會社勤務

●白名徹夫(四三大政) 大阪毎日新聞社に轉勤

●村上權一(四三大政) 大阪市東區今橋四丁目増田ビルプロカーに轉勤

●大峰光彌(二大政) 沖繩馬車軌道株式會社を辭し宮崎縣北諸縣郡城町に歸住

●大西進八郎(四大政) 京橋區山城町六、藤田鐵業株式會社東京出張所勤務

●小倉 曉(四五大政) 東京電氣株式會社門司出張所に轉勤(同市谷町一丁目)

●丸山源吉(五大政) 日本橋町五番地株式仲買上城理三郎商店勤務

●内ヶ崎真平(四四大政) 臺灣嘉義廳新營庄六十區水港製糖拓殖會社本社に轉勤

●伊東英保(四四大政) 支那上海日本郵船株式會社支店に轉勤

●木島慎一(四大政) 秋田縣鹿角郡古河合名會社不老倉礦業所勤務

●中條真二郎(六大政) いとう吳服店東京營業部勤務(本郷區本郷四ノ四二富士館)

●縣 保三(四二大政) 日本郵船株式會社大阪支店勤務

●柿崎喜代治(二大政) 日本橋本町一ノ一五平野藥店勤務(牛込鶴卷町二九八)

●中村豐雄(二大政) 大阪煉瓦株式會社取締役兼支配人(同市東區下味原町九一)

●井手時太郎(三大政) 大阪市株式會社旭造船所に入る(同市西區土佐堀五ノ二五旭館内)

●長尾景英(六大政) 三菱合資會社に入る

●山田俊太郎(六大政) 高田商會に入る

●平田圭太郎(六大政) 大阪市北區堂島濱通二丁目西垣商店に入る

●樋口兼喬(四大政) 大阪市西區立賣堀北通六丁目旭造船所に入る

●石井 繁(四二大政) 古河合名會社勤務本店詰

●内藤數次郎(五大政) 支那天津日本租界壽街東京建物株式會社天津支店勤務

●上遠野 孝(四〇大政) 株式會社名古屋製陶所に入る(同市東區武平町四ノ一二)

●原 忠宗(五大政) 増田合名會社新嘉坡支店に轉勤

●黑崎玉次(四五大政) 門司市大里荷扱所主任に轉勤(同市大里町三四四五)

●中村行道(五大政) 宇都宮歩兵第五十九聯隊服役を免ぜられ茨城縣稻敷郡大宮村大字宮淵五十二番地に歸住

●折戸芳太郎(六大政) 大阪東區瓦町通心齋橋南藤岡商店勤務

●古賀真雄(四大政) 南洋オナベ島南洋貿易會社支店勤務

●三島真藏(四一大政) 白木屋吳服店を辭す

●三宅隆一(六理工) 本所區汽車製造株式會社東京支店勤務(市外澁橋町柏木三二五田淵方)

●近藤 博(四五理工) 兵庫縣網干驛前龍鐵本社勤務

●城井三三(四理工) 神奈川縣足柄上郡北足柄村字内山富士瓦紡績會社内山發電所勤務

●藤原忠次(六理工) 大阪北區京阪電氣鐵道株式會社技士

●永井新一郎(三理工) 靜岡縣富士郡鷹岡村入山瀬富士水電株式會社入山瀬發電所主任

●綾野義一(四五理工) 東部鐵道管理局橫川發電所に轉勤(群馬縣碓氷郡橫川鐵道院官舎内)

●河野榮吉(四理工) 府下向島サトウライト株式會社勤務

轉居

- 井上邦治(3理工) 石川縣能美郡小松町小松鐵工所勤務
- 松本幾太(5理工) 廣島縣因ノ島大阪鐵工所内久原出張員
- 山根省三(4理工) 朝鮮平安南道江東郡曉達面勝湖里小野田セメント製造株式會社平壤支社に轉任
- 中泉 新(2理工) 秋田縣北秋田郡阿仁合町阿仁鐵山に轉勤
- 多羅尾織布(四五理工) 京都市松原通六波羅東入日新電機株式會社に轉勤
- 林 元一(5理工) 三井物產機械部電氣掛に轉勤(愛區三田豐岡町一重見方)
- 熊田茂次(4理工) 相州小田原紡織株式會社に轉勤
- 鹽澤正一(5理工) 米國に渡航同國 Massachusetts Institute of Technology 冶金科在學 (c/o Mr. Sears, 19, Townbridge St., Cambridge, Mass., U. S. A.)
- 廣惠吉久雄(4國) 東京女子商業學校講師(市外巢鴨町宮下一七〇〇)
- 中西稻治(四二國) 尾道市尾福日報主筆
- 寄氣實明(6國) 大阪府立茨木中學校在勤
- 江草賴多(6國) 奈良縣立櫻井高等女學校在勤(同縣磯城郡櫻井町東口大谷嶺三郎方)
- 神戸次郎(三八英) 茨城縣立下妻中學校教諭に轉勤
- 高林宗吾(5國) 北海道廳立札幌高等女學校に在勤
- 浪打義也(三八英) 秋田縣本莊中學校に轉任、兼任待遇となる(同縣本莊町櫻小路)
- 鬼塚綱彦(4國) 沖繩第一中學校在勤
- 田村六郎(四二英) 和歌山縣立田邊中學校に轉任
- 武田豐四郎(教授) 小石川區關口町一七八蓮光寺門前一如洞
- 中島音治郎(三八大政) 山口縣豐浦郡長府町大字才川
- 加藤豐次(四〇政) 靜岡縣磐田郡見付町西川尻
- 西村德太郎(三九政) 大分縣速見郡中山香村中山香驛官舎内
- 地原弓次郎(四〇大政) 筑前若松市山手通古河社宅内
- 高森幸太郎(6政) 下谷區中根岸七一山田方
- 今西謙也(5大政) 芝區三田南寺町二四城南館
- 來住靜一(2政) 大阪市北區堂島中一丁目二一
- 入江源吉(三九大政) 盛岡市川原小路一
- 木原多賀二郎(2政) 大牟田市櫻町
- 一圓五郎(四五大政) 荏原郡大井町元芝六七二
- 村山善治(5大政) 赤坂區水川町一七伊藤方
- 奥田雲藏(四三大政) 大阪市東區石町三河屋旅館内
- 太田宇之助(6政) 支那北京東單牌樓蘇州胡同朝日公館
- 水野虎之助(6大政) 神田區橋本町一ノ一〇
- 佐々木馨(6大政) 牛込區山吹町四〇佐々木方
- 藤原藤作(2法) 市外戸塚町字諏訪八二
- 山崎菊太郎(4法) 富山縣富山市清水町六
- 熊田繁太郎(四五法) 神田區表神保町一〇の下の四青木方
- 末岡秀司(4法) 市外巢鴨町宮下一八七五
- 荻窪 潔(三八法) 市外戸塚町下戸塚五二六
- 田島弘男(四四法) 埼玉縣北埼玉郡太田村大字小針九二
- 木村大見(二〇法) 本郷區追分町一一山陽館内
- 鬼頭英逸(3大法) 横濱市南太田町二二三二
- 長谷川 清(6法) 本郷區根津片町一四
- 横尾善春(6大法) 小石川區維司ヶ谷町一二五
- 大内暢三方
- 高瀬孝仁(6大文) 市外南千住町一〇四
- 崔斗善(6大文) 神田區錦町一ノ一九龍龍館内
- 重廣虎雄(6大文) 牛込區若松町一三三島野方
- 木村 節(5大商) Mitsubishi Goshi-Kwaisha, Katz Brothers Building, Raffles Square, Singapore.
- 栗原雅信(四四大商) 横濱市根岸町三二五七
- 今崎信治郎(2大商) 市外淀橋柏木四九九番地
- 高瀬方
- 齋木直亮(四四大商) 廣島市の場町二七七番地
- 大谷鏡方
- 黒坂五也(四〇大商) 市外西大久保二四三
- 添田富藏(四〇大商) 赤坂區新町四ノ四(陸軍三等主計)
- 友田五三(6大商) 牛込區袋町三三榮館方
- 仙波潤一郎(6大商) 朝鮮京城本町一丁目
- 早川武夫(四〇大商) 福岡縣福岡市下警固四三二番地
- 太田義之助(4大商) 臺灣嘉義廳南靖庄
- 中田京助(3大商) 小石川區林町九四小林方
- 横田賀利(四四大商) 小石川區指ヶ谷町九二
- 玉置鄭次(2大商) 芝區白金志田町五四
- 武市長次郎(5大商) 日暮里谷中本一八五
- 細瀧秀太郎(四一大商) 市外澁谷町字下澁谷大字長谷戸一〇九〇
- 安部一男(四四大商) 大阪市南區心齋橋筋二ノ三九番地
- 櫻山四郎(四三大商) 市外中澁谷四二五
- 三宮昌治(四三大商) 小樽區綠町三ノ八
- 芝原寅之助(4大商) 大阪市北區安治川上通一丁目古河合名會社大阪支店氣付
- 海野茂幸(6大商) 滿洲大連北大山通一五
- 神 英昌(6大商) 牛込區早稻田町三八(松本商店員)
- 田中常吉(6大商) 市外下落合村五五三
- 小松 操(四四大商) 神戸市山本通四丁目九十六番地ノ一(村井汽船合名會社神戸支店勤務)
- 藤原忠次(6理工) 京都府伏見桃山御香宮今井方
- 石井昭資(6理工) 小石川水道端町二ノ五清水大吉方
- 小林貫一(3理工) 靜岡縣富士郡島田村津田
- 森 六郎(四五理工) 赤坂區新坂町一四番地辰野金吾方
- 渡邊 清(2理工) 本郷區駒込區神明町四五六
- 大橋精一(4理工) 大阪府西成郡豐崎町南濱字萬田一八五
- 高田勇雄(6理工) 麻布區龍土町五八
- 川島一男(6國) 千葉縣君津郡木更津町元新地
- 秋山 寛(5國) 北海道小樽區若竹町
- 金井嘉佐太郎(2國) 市外巢鴨村庚申塚一八三
- 鶴田雄夫(4國) 市外巢鴨町宮下一六九六
- 中田廣市(四二英) 京都市油小路通七條上ル遠藤方
- 小川兵吉(5國) 横濱市藤田町一七三宮澤方
- 高原眞重(6數) 市外下戸塚六百〇一番地界中館内
- 藤山茂彦(6國) 牛込區早稻田町一〇番地武藏館内
- 植田耕造(5大政) 舊姓三宅(石川縣金澤市尾張)
- 増田眞三郎(四一大政) 舊姓飯田(廣島電燈株式會社員、廣島市小町山本三郎方)
- 佐藤憲弘(4政) 舊名吉五郎(帝國通信記者、牛

込區矢來町三

●吉田嘉市郎(大文) 舊姓坂東(外務省政務局勤務、下谷區西黒門町二三)

明治三年 大學部法學科出身 伊藤雄太郎
明治十七年 邦語法律科出身 坂井牧之助
明治廿二年 邦語行政科 山田武八郎
大正六年 大學部理工科 大原 繁
右諸氏の訃報に接し哀悼の至りに堪へず
茲に謹んで弔意を表す

學生會合

稻香會成る

高等師範部國語漢文科二年生より成る稻香會は委員淺井正純、井口明弘、是洞健雄、田所國輝、土生武猷、森勝久諸氏韓旋の下に十月十八日午前十時より牛込八千代俱樂部に於いて其の發會の式を舉げたが、會する者六十餘名にして、委員開會の辭に依りて開會。

祝稻香發會式
望會員諸氏
思ひ出づるまに

余の希望
挨 拶
日獨戰爭從軍實話

榮華の餘哀
今後の教育問題
所 感

等の演説あり。又其の間薩摩琵琶、筑前琵琶、尺八合奏等の餘興ありて一座の感興を惹き、和氣霽々の間に盛況を極め、やがて散會せり。

商科一年經濟學會

讀書會成る

兼て商科一年經濟學會員中より北澤先生讀書會員を募集せし所、應募者意外の多數に上り止むなく抽籤を以て廿名を選び、商科一年讀書會を組織し、其の第一回を十一月一日北澤先生邸に開く。午後七時の開會。北澤先生は讀書會開設の主旨並びに研究方法を詳細に述べられ、終りて自己紹介に合せて自己の總ての物に就ての好惡を紹介する事となるや、或は夢を好み、夢に就ての文藝作品を集め、其等より眞實なる人生觀を得んと努むる人あり、蛇を嫌ふあり、烟草を惡むあり、其生國にも薩摩人あり、陸奥人あり、茶を呑み、菓子を食べしつ、時の移るも知らぬ顔に、稀に見る愉快な夕を送りつ、散じたのは十時だった。

因に當夜、高田義雄、横田茂二君を委員に推選し、來る四日鎌倉旅行を決議した。出席會員は、阪本財地、水谷謙藏、増永昇、田中益太郎、山口新吉、杉内賢吾、高田義雄、栗田兼三郎、上野壽、井上成意、横田茂、信國鵬介、藤沼彌一、古瀧、山崎一重、水野憲次、中上英雄、木下清雄、岡田正三、松崎兼松、竹内正男の諸君であつた。(三浦生)

●支那協會 連日の曇天未だ霽れやらず東洋の政局徒らに錯雜せるに似たる拾月拾九日午後七時我支那協會第拾五週年第一回茶話會を矢來俱樂部に開催す。青柳會長渡幹事を始め眞摯なる校友及び會員五拾有餘名、殊に本

協會の先輩にして朝日新聞北京特派員として數日前迄北京に滞在せられたる神田正雄氏を迎へ得たるは吾人會員一同の深く喜びとしたる處なり。前田幹事開會を宣すれば、青柳會長徐に立ちて我支那協會の明治三十六手呱々の聲を上げてより今日に到りし歴史を詳述せられ、延いて支那研究の態度は常に自勵的に出で、堅實なる思想豐富なる知識を要し、徒爾なる大言壯語其の實質の伴はざるは有害無益なりと新入會員歡迎の辭に代へて深く戒めらる。次に本協會員松岡正一君本夏期休暇を利用して滿鮮地方に旅行せられたるを以て「滿鮮經濟雜感」の題下に、大連長春撫順平壤等に就き、氏の得意とせる經濟的見地より詳述せられたる後、吾人は須らく大陸に發展すべしと結論せらる。次に神田先生演壇に進み『列國に對する支那問題』の題下に北京外交の表裏觀察談より六國外交の參戰問題に至るまでを詳述せらる。談實に外交の機微に觸れ、誠に支那協會員たるが故に聞くを得たるの感深く、會員一同の満足此れに過ぎず。時正に十時茶菓の饗あり。青柳會長及び神田先生事故ありて辭去せられたる後尚ほ歡談盛んに起り和氣堂に滿つ。突如本協會員渡邊清綱君戰後に於ける大連の價值なる題下に演ぶる所ありしも充分なる材料を持ち來り居らざればとて『滿鮮觀察談』と改題せられ、氏の銳利なる觀察は其諸語により益光彩を添へ、大連の風俗を語り奉天の靈廟を述べ、旅順の戰跡に心氣凄慘たらしめ、平壤のお牧茶屋に情緒纏綿たらしむ。然して最後に日本人は常に支那人を輕侮する之れ最も憤む可き所にして、日

支親善は兩者の握手にあらすして何んぞやと説破す。尚鈴木理平前田政勝兩君の演説残りしも時既に十一時半、止むなく散會を宣す。門を出れば沃雲天を鎖し四邊寂として聲なし。

●早稻田基督教青年會 同會は拾月廿九日午後七時半牛込區辨天町友愛學會に於て本期第一回修養會を開き、シユライエルマッハーの神學と云ふ演題の下に角田桂藏氏の講演ありたり。次で本會總會を開く。決定事項左の如し。

本會會則は

第三條 會員を分ちて正會員、名譽會員及び會友とす

一、正會員は本大學々生にして本會の主旨を賛するものとす

二、名譽會員は本大學教職員にして本會の主旨を賛するものとす

三、會友は本大學校友にして本會の主旨を賛するものとす

第四條 本會役員は正會員及名譽會員より就任するものとす任期は一ヶ年とし再任を妨げず

第五條 本會役員左の如し

一、幹事若干、名譽會員中より之を推薦し本會々務顧問の任に當るものとす幹事中一名を常任幹事とす

二、委員七名正會員中より選舉し集會記録會計の會務を分擔す……と改正す

後北澤新次郎教授の御話と各係の報告あり役員選舉の結果左の如く決定す。

常任幹事 北澤教授

集會係 大政二年 速水久彦
理電一年 荒井鹿三郎
商科一年 飯島勉

記録係 大政一年 板野譽雄
文科一年 藤井藏之助

會計係

商科二年 藤山 政一
商科一年 諸橋 元三郎

而して本會の事業として例に依り戸塚信愛學舎にて聖書の研究、毎月修養會、米國研究會、その他色々の研究會春秋二回大講演會を開く事とせり。それより茶話會に移り、和氣露露の裡に時の過ぐるを知らず、最後に校歌を合唱して閉會す。本日の來會者多數にして實に盛んなりき。(學記)

●建築學科早苗會 十月六日午後一時より第六回早苗會總會を第七教室にて、繪畫展覽會を圖書閱覽室にて開く。其順序左の如し。

- 一 開會の辭 二年委員 十代田三郎君
- 一 挨拶 同 木村幸一郎君
- 一 同 三年委員 西野 利雄君
- 一 同 一年 相曾 敏雄君
- 一 所感 佐藤 先生
- 一 實世間に關れて 德永 先生
- 一 早苗會諸般報告 新津 孝一君

- 茶菓
- 一 展覽會に就て 佐藤 桂次君
- 一 建築非藝術論 松澤 一松君
- 一 一面觀と綜合觀と 岡田 先生
- 一 朝鮮支那旅行談 佐藤 先生
- 一 入賞繪畫批評 今 先生

卒業生、上遠武治、同三郎、桐山均一、河合清、峯彌太郎、古塚正治、竹田米吉、山本拙郎の諸氏佐藤、岡田、今、德永、後藤の各先生出席せられたり。當日は新入會員(一學年生)の歡迎と、德永先生の新任を祝する意を兼ねての大會にて出席者多く、佐藤先生の朝鮮支那旅行談は多大の興味を以て聴かれ、岡田先生の談話は例に依り先生一流の犀利なる觀察と論法にて頗る深き感銘を與へたり。繪

畫展覽會は又例になき盛會にて、建築學科關係の諸先生及卒業生諸氏の出品もあり。其數七十二點に及び、其中入選として早苗會賞牌を贈られたるは左記五氏なり。

- ニコライ 三宅 勲君
- 戸 松澤 一松君
- 神戶山の手の畫 十代田三郎君
- 多摩川 佐藤 桂次君
- 馬場 眞三君

最後に村野藤吉君より第二回懸賞設計圖案募集の發表あり。散會せしは午後五時頃なりき

●早稲田學報會 十一月三日(土曜日)午後三時半より、母校(京北)教員集會所に例會を開いた。出席者は村山靜雄君、大井順一君、土橋敬英君、津田誠一郎君、河村春三君、坪井敏君、佐原忠雄君、黒田稔君、田中實君、鶴崎重文君、阪本安君等で、先づ幹事選舉があつて左の二君が當選した。

大商二年 大井順一君。大文一年、土橋敬英君。
次に新たに豫科委員を設けて會員の聯絡を計る事として、左の三君が當選した。
理工科豫科一年N組 阪本安君。商科豫科一年丁組、佐原忠雄君。同上(乙)組 河村春三君。

それから母校及び鷄聲會と、我早稲田鷄聲會との聯絡が完全でなかつたから、今後はそれに就いて何等か方法を講ずる事を決議し、それより茶話會に移つて、呑み、食ひ、語り十二分の歡を盡して午後七時散會した。たゞ残念だつたのは、京北實業學校出身の諸君が一人も見えられなかつた事である。此次からは、

中學出も實業出も、皆一致の動作を取られん事を希望する。尙ほ今後は、母校に何かある時又は其他よりの通知、招待等に接した場合、能ふ限り敏捷に、本科豫科控所へ揭示して、會員諸君に報告する事にする。(土橋記)

東亞俱樂部支那旅行記(二)

(旅行要記は十月號の學報に在り)

支那の夏旅なれば、苦しみは覺悟の前、されど歸りはいつれ九月の下旬、氣取る必要もなく急ぐつもりもなき、氣樂氣儘な書生の赤毛布其珍談も數あるべし、殘らずさらけ出して笑ひの種となさん、但し本人達は頗る眞面目なり。

熊野丸

本年七月六日神戸解纜の熊野丸には七人の早大健兒を載す、勿論サードクラス、室は低くして穢し、されど意氣は軒昂なり、
須磨舞子明石の青松白砂は手に取る様、右には淡路繪島が手を以て招く、數多の帆船小船を後にし前きにして、迎へ送る島々の中を縫うて、油を流した様な瀬戸内海を我舟は走るなり、かくて我等は美しき海を飽す眺めて夜に入りぬ、
天候は變りぬ、雨降り出したり、我等は暗き室に閉ぢ籠りて陰鬱の氣に蔽はる、突然異響ありて停船す急ぎ甲板に登れば、今漁船と衝突したるなりと、船は破れたれども人は助かりぬ、濡鼠となりし船頭夫婦は我等が室に來りぬ、此處は伊豫岬、四國の人か、家には母あらん、子やあらん、今宵の夢やそいかに、

細雨煙る門司に着きしは朝まだ早し、四五人は上陸して日本の垢を流せり、
船は午後四時出帆す、さて愈々日本を去るなり、送る人送らる人、悲しむ人あるべし、船の尙早きを望む人もあるべし、我等が中にも始めて航海するも

の大部分なり故郷を思ふ者あるは是非もなし、船は玄海灘にさしかゝる、雨益々加はり風愈々強く、波高からざるべからず、船の動搖甚だし、甲板に出て高唱し以て酔を避くるものあり、横ばりて靜かに伸吟するものもあり、窪田君の音聲最も高く、水内君最も船に弱し、此夜より事務長に交渉して二等の喫煙室に眠る事を許さしむ、
明くれば快晴なり、水青く渺茫たる大海に一線を劃きて走る亦痛快ならずや、殊に船中に樂しみあり甲板鐘球と呼ぶ、一二等の商人船客と一行と源平に分れ、實業組となし、學生組となして共に相闘ふ事終日、一々に綽名を附し野次る事盛なり、野次はお手もの、支配人様も顔色なし、或は蓄音機あり或は基將棋あり、かくて嬉々として樂しめば波靜なる時は航海の苦更になし、今日の美景は濟州島のみ、

七月九日 今日上海に着く日、喫煙室の夢破れて外面を眺れば風光既に異れり、船は今黃浦口を溯れるなり、水は黄にして家の形亦奇なり、支那の地に近けりと思ふと胸何となく躍る、はや日本郵船會社の碼頭に着く、江を走る小船、岸に浮る民船、船、車を臨んで廻り歩く若力、異様な馬車、一として目を驚かさざるはなし、人群を排して上海の地を踏む、心もそはく歩も危く、西も東も分らず、導る、まゝに客引に従ひて電車にて江口の勝田館へと急ぐ、

上海 第一日

崑山路 朝餉を済まして崑山路なる宮崎滔天氏宅を訪ふ、滯在中の同夫人の好意に依り、同邸に逗留する事となる、家人橋を設けず襟懷廣き事江の如し、かくて宿は定まりぬ、
足は當てもなく市中を徘徊す、肉を店頭に掲せるもの、一輪車にて物を運び歩むもの、皆珍らし、七人連れの諸君がキヨロ々と行人織るが如き中を見

物し歩く圖は、必しもよき體裁ではあらざりしならん、歩む程に我等は四層の高樓の前に立てり、門標を見れば上海日本人小學校とあり、やあ素敵な小學校だ、日本にもないぞ、寄て行く可しと、七人の大學生は學校の門を潜りぬ、

上海日本人小學校

建築費十三萬兩を投じて、上海の居留民が一大奮發をなせるもの、曾て宏壯斯の如き小學校を見ず、未だ全部の工事竣成せず、完成の曉には、尙驚く可きものあらん、校長は小學教育に令名ある乙訓訓助氏なり氏歸朝して在らず、主席の齋藤君應接す。

四層樓の大建築空に聳え、以て上海全市を瞰下すべし、教室の外裁縫室、料理室、作法室、實驗室、應接室教師の準備室、劍柔の道場等備はり、其講堂の如き遠く早稻田大學の比にあらず、外觀の美將に整はんとす、當地のパブリック、スクール亦之に及ばず、内容の實果して之に伴はんか、健全なる第二の居留民は此門より出でん、

校内に於て政治科二年の大瀧木村の兩君に邂逅し、互に其奇遇に驚く、相携へて兩君の宿所を訪問し記念の撮影をなす、(寫眞は次號より)

引き詰める煉瓦路は炎けて釜底の如し、暑き上海の日中は吾等をして切に新緑を思はしむ、一同は北四川路の新公園に向ふ、新公園は上海公園中の最大なるものなり、巨大なる印度巡査出入を監視す、彼を捕へて英語にて道を聞く、愈々外國語の使ひ始め、中々危し、

廣き芝生の木陰に憩ひて、充分英氣を恢復して六三公園に廻り、大神宮を拜して電車にて、勝田館に飯を喰ふ、途中日本郵便局に寄りしが其宏壯なるに一驚せり、

黃昏に崑山路へ引き移り、湯に一日の勞を醫して、始めて支那料理の食卓に就く、最初互に顔見合せてソツト箸を出す、大丈夫喰へると前田氏(夫人の令弟)に云はれて漸次箸の活動は烈しくなる、支那人

は個人主義の發達せる國民なるに、食事のみは頗る共同的なりと感心せるものありたるが、成程吸物も共同菜も共同、但し箸と飯は別々なり、吸物は一の大碗にあるを各匙にて吸ふなり、其匙と箸が前田氏の運動に従ひて動くもいと可笑、

上海 第二日

市場見物

朝風く起きて虹口のマーケット見物をなす、上海の市場は數ヶ所あり、中に就きて最も大なるを虹口の市場となす、一大市場は一坪二坪の區別を立て、大小各種の賣店數百あり、購はんとするものには各國人あり、驚くものは日本人と支那人のみ、

肉屋は肉屋の軒を連れ、魚類然り、野菜然り、かくの如く同種の賣店數十相接して、各新鮮を誇り、安價を語れども、中々に懸値烈しければ買賣共に容易ならざるが如し、其混雜手を洗ふが如く、晏然として見る事能はず、されど午後に至れば悉く商人去りて、取り片つけたあとと水道にて掃除をなし、極めて秩序あり且つ清潔なり、日本橋の魚市場よりは確に整頓せり、

訪問

一行は二隊に分れて訪問をなす、

一隊は日本居留民團に小崎氏を訪ふ、氏は母校出身にして滯支十三年溫雅の紳士なり、吾人に勧むるに圖書にて、充分感知する事能はざる實際的方面の支那を見る可し、即ち散歩するも亦須く注意を要すと次に足を上海日本人實業協會に運ぶ、吾等が先輩東

則正氏は永く此處に書記長として令名あり、功績の一端は表はれて中部支那經濟調查書となる(上巻既刊)、然るに其後任たる法學士安江氏は、曾て天津に於て某商店の支配人として手腕のありし人、上海の

實業協會が全支同協會の内にて、幹然として其頭角を現はせるは當然なり、蓋し歷任其人を得たりと稱すべし、此處より出づる週報は支那研究及貿易に従事するもの、缺く可からざるものなる事を附記す、

他の一隊は、彼の一世の後傑荒尾精の高足たる白岩龍平及木幡三郎の兩氏を日清汽船會社に訪づる、兩氏幸に我俱樂部の主旨を賛し、旅行に付き能ふ限りの便宜を與ふる事を約す、かくて揚子江の航行は頗る好都合たるを得たるなり、吾等の先輩清水迦平氏は會社を去る事遠からざる、英租界の江西路にて増田洋行支配人として活動す、氏は商科出身としては珍らしき政治的識見を有し、一門客たるを失はず、商業政策は其專門とするところなれば、之れに假すに増田と言ふ大資本力あるを以て、其發展は頗る刮目に價すべけん、我等の意を強うする校友の一人なり、

夜に入りて支那人を伴ひ、佛租界なる何天燭氏の門を叩く、氏は革命黨の重鎮、吐くところは支那現代政治の腐敗、痛恨の情面に溢る、氏に依りて唐紹儀氏以下支那知名の士を訪問するの便を得たり、

上海 第三日

連日の運動に疲れて、射るが如き日光を浴びて床を蹴る、上海日報に目を注げる一人は一呼して曰く、

出て居るぞと、何が何と一同集る、やあ出て居る々と皆嬉しげなり、即ち吾等東亞俱樂部の趣意書及旅行團の姓名及其旅行の目的等載する事詳細なり、

尙今晩校友の歡迎會ありと、豈に欣然たらざるを得んや、元氣幾倍して佛租界に孫洪伊氏を訪はんとす東道の主は民國飛行家の一人劉佐成君なり、早稻田健兒と青年革命黨員とは手を携へて、中華民國内務大臣たりし孫先生の門を潜る、

刺を通すれば直ちに薄暗き應接室に導かる、

總て孫さんは肥満の體軀を悠々として運び来る、直謀の産と記憶す、大體に於て北方の人か體格堂々たり、溫容迫らざるが如き態度なれども、實は激烈蠻勇の人ならん、即ち其語る一節に次の如き言あり、

「支那の政治家惡いてす、就中四五人の最も惡いものあり、之れを殺せば支那の天下は治平です」と、あゝ、孫さん嘗て北京に於て南方派の爲めに氣を吐く事壯烈、鬼神も其意氣に感ぜしならん、然れども遂に意氣の人たり終り、智に缺くところなきを得ば幸なりと、吾等をして此感を起さしめたり、

されど氏は支那の南北不統一にして、國內に争亂の絶えざるは、宛も病人の身體が機關の變調を來せるが如し、之れを治するものは日本と云ふ醫者あるのみ、即ち日本は兵力あり、智力も勝る、須く先生となりて支那國民の開發に任せよとて、日支の親密なるべきを切望せり、

革命黨の好老輩譚人鳳氏は孫さんの近くに住す、譚さんは年齒方に七十余なれども至つて矍鑠たり、矮小なれども元氣壯者を壓す、談論風發、若し博學たらしめば確に支那の大隈さんなり、頻りに兩國青年の理解親善を説き、國民相互の提携を主張し、官僚打破を力説す、最後に大隈さんを推獎し、寺内さんを攻撃する事舌端火を吐くが如し、

電車に乗りて歸らんとて大路に出づれば、赤色の一怪樓を見る、中華民國工黨本部と記せり、之れ激烈なる青年革命家韓厥君の本城なり、家に壯漢數人あり悉く頑丈の體格を有す、支那に労働黨とは餘り新し過ぎるが如けん、推察するに或意味のものならん要するに韓君は實行家なり、

左門塾

さて今日歩みし所は佛租界にて革命黨の根據地、血汐に縁の深きところなり、第一第二の革命時は勿論、其間にても時々短銃の音響を聞く由、彼の準の如き陳美氏が斃れしも亦今吾等の立てる、前の家なりと、説明を聞きて凄慘の氣鬱に迫る、然れども道路清潔にして兩側に楊樹低く垂れたれば、支那に稀れる靜寂なる街路なりき、

午後上海日々新聞社に當地社長を訪ふ、氏は曾て四谷左門町に張繼氏等と私塾を開き、日支共同生活を營みし人なり、諄々として説き去り説き來るところは悉く肺腑より出る熱語誠辭なり、經驗ある人の誠意の教訓は青年の胸を刺すべし止まず、日本人にしてよく支那人の性質を解するものは極めて珍し、日本人は云ふ、忘恩は支那人の通性なりと、否忘恩は人間の通性ならずや、之を悟らざるは愚なり、人恩を他に與ふる時は必ず報酬を思ふ可からず、小面倒なる條件にて縛つて置きながら、恩を施せりと思ふが自惚れなり、

又支那人は趣味を帶ぶ、悠容迫らざるは之れ趣味なり、而して之を買ひ彼らは日本人なり、張動に接して其態度と體格に乘せられし田中次長は即ち其一例と云ふ可し、

將來は切に諸君の努力に待つべし、されど記憶せよ支那は既に世界の支那なり、外國語を解せずして支那を論ずべからず、奮勵勉學せよ諸君と、

校友會

崑山路に歸り一浴の後車を連れて、一同は日本人俱樂部の校友歡迎會へと急ぐ、旅行第一回の歡迎會、來り集まる校友二十餘名、福建料理の卓を圍みて獻酬盛んなり、和氣堂に満ち意氣四百餘州を呑む、他人交へずの水入らず、樂しからぬ筈はなし、散會の時の校歌は定めし上海人士を驚かしたらん、校友の内の稍老輩も思ひを遙かに戸塚原頭にて走せしなるべし、此夜夢圓なりき、

上海 第四日

前國務總理唐紹儀

七月十二日午前九時、劉氏を加へたる 行八人は唐邸の鐵門の前に立ちぬ、既に來客あり、待つ事瞬時、眼鏡を懸けし唐さんは丁寧な挨拶、思ひ掛けぬ謙讓の態度に一層床しさを増して、其誠所に傾聴せしめぬ、支那は南北に分裂すべきものにあらす、歴史を綴り

ば直ちに明了たらん、北は南の食物なくて獨存する事能はず、されど現代の支那には思想に新舊の衝突あり、假に稱して南北兩派となす、然れども北方の人にして、新しき思想を抱きて所謂南方派なるものあり、かくて又南方人にして其思想古く守舊派に屬するものあり、之れを以て世人誤りて地理的に南北兩派の分立すべきを主張するは早計なり、

さすがに革命黨の首領の一人として、殊に政治的經驗家の少き此派に取りては、缺く可からざる大立物と受け入れらるゝ處あり、唐さんは確かに政治家にして且つ政治學者なりと深く思考せしめぬ、訪客を接して至る、乃ち辭し去る、去るに臨みて唐さんば自ら門前迄一行を送りぬ、

此日唐さんの家にて合ふ筈の張繼さんは來らず、急ぎ佛租界に氏を訪れたれど昨夜は家に歸らずと、乃ち租界外の東亞同文書院に森茂教頭を訪問す、

東亞同文書院

書院は現に徐家匯虹橋路に在り、前の校舍は第二革命の兵變に罹りて焼失し、現校舍は竣工間もなき様なり、所謂上海の郊外にして風致あり、涼風盛に來りて上海の日中たるを覺えず、此校の沿革に遡れば彼の荒尾精の日清貿易研究所は其前身なりと、現に對支事業經營者の唯一養成所にして、既に業を卒へて活動せるもの六百名あり、新設の農工科には支那學生の入学を許し、農工に關する科學的知識を與ふる由、支那の開發は支那のみに利益にあらず、進んで支那人教育に盡すべきなり、

森氏の好意に依り晚餐の饗應を受く、八時頃園の田舎路を紹興酒の酔に任せて歩く程に、村外れの一茅屋に土民が集ひて胡弓を引くを見る、周圍の夜景と相俟つて、哀愁の氣分は痛く我等の感情を刺激せり、歸途ブリッツ、ガーデンを道過す、公園は英國の經營なり、位置よし、兩面江に沿ひ一面を電車走る、一日の勞を醫するに足るの設備を有す、本國を離れ

て遠く東洋に活動する其元氣既に潑刺たり、アーク燈の下、樹間を廻り芝生を踏みて嬉々として樂しむ幾組の夫妻あり、子を伴へるあり、吾等は其活潑なるに見落れたり、あゝ彼等は樂しみて働き、喜んで遊ぶなり、而して日本人の活動と彼等の夫れと異るは、蓋し婦人教育に貢ふところ深きにあらざるや、園を出て、橋を渡る、橋はガーデン・ブリッツヤと呼ぶ、上海鎮守使鄭汝成の墅たれし所なり、橋より我總領事館へは道遠からず、

上海 第五日 休息 日

幾日かの活動と慣れぬ暑さにて、一行の顔色何んとなく衰へたり、旭光ベッドを射れども身を擡ぐるものなし、疲勞せしならん、即ち夫人の注意に依り一日氣樂に遊ばんとて、或ものは公園に或は水泳場へ、或ものは支那街見物に又は碼頭へ、

夜に入りてはボーイの案内にて酒馬路に行く、此處は銀座と淺草公園と吉原とを混合せしが如き所なり、商賈軒を連れ、茶館林立す、熱鬧喧嘩せるが如し、人込みの中を縫うて歩む程に、殊に大なる茶館の前に出づ、導かるゝまゝに樓に登れば其大なる人々の多きに喫驚せり、大小の卓其數を知らず、之を廻りて各々喫茶す、菓子運ばれ茶は注がれ、慣れぬ手付きにてボリ々やれば、饒て熱きタタルは一々に渡されぬ、蒸し暑き夜に熱きタタルを顔へ當てるは甚だ快よし、商談は多く茶館にて行はるゝなりと、盛んなりと云ふ可し、

上海 第六日

翌くれば七月十四日、愈々夜半の汽車にて南京に去らんとす、各自方面を異にして準備忙はし、或ものは日清汽船に馳せて切符を求め(乘船は南京なれども上海支店にて販賣す、割引切符は尙更の事なり)或は校友會の幹部に謝辭を述べ等あり、午後に至りて寸暇生ず、乃ち相携へて有吉總領事を訪ふ待さるゝ領事館の樓上より遙かに黃浦江を隔て、

前方を眺むれば、旌旗翻々たり、洋人盛裝して車馬を走らすこと織るが如し、又眼下のブリッツヤ、ガーデンには兒女嬉々として戯むる、即ち知りぬ、今日は佛蘭西革命の記念日なるを、かくて領事も今佛國領事館に出て行く處なりとて、會談僅かに數分、聴く可き意見もなく、溫厚の紳士とのみ感ぜられたり、

南船北鐵論

過ぐる日、松井中佐を訪れし際、紹介を受けし佐原篤介氏は一流の論客なるを以て、歸途氏の寓居を驚かす、咽喉を害せる氏は快く吾等を引見して數刻熱心に語れり、氏は咳一咳して曰く、日支親善を標榜し之れを口にするは贅なり、吾人が支那に於て眞面目に働き日本實力を扶植せば可なり、即ち支那に於ては實力主義ならざる可からず、而して外國人に打ち勝つ時始めて日支親善は期せずして成就するなり、故に如何に政治家や軍人及外交官等が騒ぎ廻るも、外國に對する日本の實力を支那人の認めざる間は、眞の親善は不可能なり、此見地よりして日清汽船會社の如きは宜しく之れを擴大して、北に於ける南滿洲鐵道株式會社の如き組織となすべし、而して之に支那航海及其他の沿岸航路の全部を任せて、彼の郵船、商船等は宜しく尙大なる航路に專意努力開拓せしむるの必要あり、斯の如くして我が統一的大勢力は中南支那に現出して、以て能く英國の天狗的勢力を抑制して日支親善の實を擧げ得べし、即ち日清汽船會社は航海航路のみならず、或は鐵道に或は鑛山に或は工業其他の産業に渾一的實力を投じ、之れが經營に當るなりと、所謂南船北鐵論の梗概にして傾聴せしむるの議論なりき、

夜は別宴なればとて夫人の好意に依り、食卓殊に賑はしく夫人令嬢出て、吾等の行を盛にす、座に杜君なる若き革命家あり、愈々數日の後、廣東に赴くべしと、時に南方派の勢力は廣東に移れる秋なり、杜

さん、健全なれ、

運動

●秋期水上運動大會の休止 九月三十日夜襲來せる風水害の爲め短艇破損せるに依り、本年に限り秋期水上運動大會を舉行せざる事となれり。

庭球部全捷記

過去幾歳全捷に全捷を重ね、斯界に覇たる吾庭球部は、今秋も亦全捷、稱霸の榮を得たり。今春多くの選手を送り出し、戸塚の秋色更角懸念に堪えざる者ありたる吾部も、夏期練習に熱烈を極めたる其効果は再び月桂冠の所有者となりしなり。

▲對高師戰 雨の爲延期に延期を重ねし定期試合は十月七日午前十一日本校々庭に於て對高師戰に依り開始されたり。最初より優勢にして吾部は中頃彼に一の優退を與へしが、後援繼かず、一として吾に敵する者なく、吾御大寺内組の出づるや彼優退組を輕く三〇に破り、優退三組を残して大勝せり。經過左の如し。

本大學

高師

- | | | | |
|----------|---|---|---------|
| ○對木、森 | 三 | 一 | 湯淺、田中、● |
| ○對木、森 | 三 | 一 | 西村、岡本、● |
| ○狩野、竹下 | 三 | 一 | 三木、立川、● |
| ○狩野、竹下 | 三 | 一 | 吉田、中西、● |
| ○三上、佐藤久二 | 三 | 一 | 山田、野村、○ |
| ○河合、中川 | 一 | 三 | 山田、野村、○ |
| ○西本、上田 | 三 | 一 | 遠藤、山田、● |
| ○西本、上田 | 三 | 一 | 宮地、土井、● |

●山崎、佐藤正二 三 山田、野村、○

●寺内、福田 三 一 山田、野村、●

▲對高商戰 十月十七日午前九時高商校庭に於て開始されたり。高商には中村組ありて過去幾度か吾陣容に迫り、高商の今日あらしむる猛將なり。此日の勝敗は實に爭霸戰なりき。果然、中村組は吾猛將西本組に迫り、白熱戰を開始せり。ゲームは二オール、ジユースを繰り返す事五度、見る者をして手に汗を握らしめ、近來になき接戦なりき。されど西本組運なかりしか、終に彼をして名をなさしめたり。中村組のアタリを以て如何なる結果を見んと思へしが、次なる河合組立つや、得意の猛球を以て攻め立て、さしもの中村組も手の出づる所を知らず、前衛中川又大膽にモーシヨンを起し、中村の球を取り、終に三一一にて御大中村組を破りし河合組は今秋第一の戰功なりき。而して吾は優退三組、不戰一組を残し大勝せり。經過左の如し。

本大學

高商

- | | | | |
|--------|----|---|----------|
| ○對木、森 | 三 | 一 | 新井、山崎、● |
| ○對木、森 | 二 | 三 | 石川、扇山、○ |
| ○狩野、竹下 | 二 | 三 | 石川、扇山、○ |
| ○三上、西田 | 三 | 一 | 久保田、藤岡、● |
| ○三上、西田 | 三 | 一 | 山田、佐藤、● |
| ○樹下、佐藤 | 三 | 一 | 久保、淺野、● |
| ○樹下、佐藤 | 三 | 一 | 西方、千葉、● |
| ○西本、上田 | 二 | 三 | 中村、井上、○ |
| ○河合、中川 | 三 | 一 | 中村、井上、○ |
| ○河合、中川 | 三 | 一 | 石川、扇山、● |
| 寺内、福田 | 不戰 | | |

野球部消息

十月十四日法政大學運動場に於て法政と試合

をなし、九對三にて勝つ。同じく廿四日第二回戰に於て六對一の成績を以て勝つ。十月廿七日日本大學運動場に於て明大と戦ひしが、非常の接戦にて、結果は一對零にて我が勝となる。十月卅一日再び我運動場に於て明大と戦ひしが、是れ又興味ある接戦にて一對零の結果を以て我が軍敗る。尙ほ詳細なる報告は次號に掲載すべし。

教職員庭球俱樂部

第二回會計報告

(自大正六年一月至大正六年八月)

收入之部

一金百七拾圓四拾六錢也 總收入金

內譯

一金百參拾五圓四拾六錢也

一金參拾五圓也

一金參拾五圓也

支出之部

一金九拾七圓四拾參錢也 總支出金

內譯

一金貳拾四圓八拾錢也

一金貳拾四圓也

一金拾五圓也

一金拾貳圓五拾錢也

一金拾壹圓九拾八錢也

一金四圓九拾錢也

一金參圓也

一金八拾七錢也

一金參拾八錢也

差引金七拾參圓參錢也

左の通りに候也

現在高(銀行)預金

大正六年八月

幹事 大澤、立川、高橋、岸畑

會員各位

追て本會計報告は九月の學報へ掲載の筈なりしも種々の事由により延引致し申譯無之候何卒事情御含めの上御諒察を乞ふ。

雜報

大隈總長の歸京

侯爵大隈總長國府津別荘に豫後靜養の事は前號に報道し置きたる所なるが、其の後健康回復、十月二十二日歸京せられたり。

●大隈維持員の支那行 維持員大隈信常氏は十月十一日出發校友代議士關和知櫻井兵五郎兩氏其他二三氏同伴實業視察の爲め支那行の途に上られたるが十一月下旬歸朝の筈なり。

●平沼教授の地方講演 教授文學士平沼淑郎氏は十月七日栃木縣久下田町教育會總會の聘に應じ、同日午後一時より同町小學校講堂に於いて、『時局と郡村』の題下一場の講演あり。同行の校友日本之實業社主増田義一氏亦

『發展の要素』の題下一場の講演ありたるが會員數百名盛會なりき。尙ほ講演終了後、平沼教授は會員より需めらる、揮毫に忙殺せられたりといふ。

●浮田教授令嬢の結婚 教授法學博士浮田和民氏令嬢操子(二十四歳)は明治四十二年本大學大學部商科出身の秀才、今は新進氣鋭の少壯實業家として將來を期待され居る原安三郎氏(三十四歳)と結婚せられ、十月廿四日築地精養軒に紳士紳商二百四十餘名を招待して披露

の宴を張られたり。
●艇庫番人へ弔慰金を贈る 九月三十日夜風
水害襲來の際艇庫番人の妻死去せるを痛み、
本大學より弔慰金を贈りたり。

東京風水害救済金

募集報告

東京府及び市の風水害の甚しきは今更いふ迄もなく、我が學園も之を傍觀するに忍びず、
十月十三日徳永、内ヶ崎兩理事は學生代表者
十數名と共に府下南葛飾郡砂村及び市内月島
を視察したり。一行は慘狀を目撃して救済金
募集を決定せねばならぬ決心をなした。よつ
て十六日全學各部各組委員會を召集し討議の
結果義捐金募集に一決し、直ちに學生控所に
揭示し、十九日正午までに理事室に持参せん
ことを求めたり。事急に出でたれば如何かと
危みしに案外の成功にて左の金額に達した
り。依つて翌廿日午前十時大政三年の委員吉
田、橋本、荒木の三君は内ヶ崎理事と共に東
京商業會議所内の東京風水害救済會に赴いて
寄附の手續きを了し、左の受領書を得たり。

第壹五八〇號

領收書

一金壹百四拾貳圓參拾七錢五厘

東京風水害救済會へ御寄附

右正三領收候也

大正六年拾月廿日

東京風水害救済會印

早稲田大學學生有志殿

一金壹百四拾貳圓參拾七錢五厘也

內譯

一金二四八十六錢也 高等豫科 A 組

一金三四十錢也	同	B 組
一金一圓六十錢也	同	C 組
一金二圓九十九錢也	同	D 組
一金四圓二十三錢也	同	F 組
一金三圓六十四錢也	同	H 組
一金二圓也	同	J 甲組
一金一圓八十錢也	同	J 乙組
一金二圓四十五錢也	同	K 組
一金二圓四十二錢也	同	L 甲組
一金三圓也	同	M 組
一金五圓二十七錢也	同	N 組
一金八圓七十錢也	同	S 組
一金三圓五十錢也	同	Y 組
一金四圓三十錢也	同	U 組
一金一圓四十五錢也	同	高師、數理科二年級
一金二圓七十錢也	同	三年級
一金九十錢也	同	英語科二年級
一金一圓五十錢五厘也	同	三年級
一金二圓六十錢也	同	國漢科二年級
一金二圓二十五錢也	同	三年級
一金三圓五錢也	同	理工科採礦科一年級
一金一圓十九錢五厘也	同	二年級
一金二圓也	同	機械科三年級
一金五圓四十錢也	同	同應用化學科一年級
一金三圓九十錢也	同	商科一年 A 組
一金五圓六十九錢也	同	二年 A 組
一金二圓七十錢也	同	二年 B 組
一金二圓四十二錢也	同	二年 C 組
一金三圓六十三錢也	同	二年 C 組
一金五圓七十三錢五厘也	同	三年 C 組
一金二圓三錢也	同	英文科一年級
一金三圓四十錢五厘也	同	哲學科一年級
一金一圓四十五錢也	同	哲學科二年級
一金一圓十錢五厘也	同	哲學科二年級

一金二圓五十錢也	專	一年級
一金一圓四十錢也	同	三年級
一金五十錢也	大	一年級
一金二圓也	大	三年級
一金四圓四十七錢也	專	二年級
一金二圓四十四錢五厘也	同	三年級
一金七圓十錢也	大	一年級
一金五圓六錢也	同	二年級
一金三圓三十五錢也	同	三年級

追加 一金十八圓八十四錢五厘也

內譯

一金五圓七十六錢也	高等豫科	P 組
一金二圓三十錢也	同	R 組
一金二圓八十二錢也	同	T 組
一金十錢也	商科一年 B 組	
一金一圓九十六錢五厘也	大	一年級
一金一圓八十錢也	專	一年級
一金四圓十錢也	大法專法	二年級

へたり。(委員報)

●砂村小學校長よりの謝狀 砂村小學校長宛に風水害救済義捐金追加額を送りしことは別項記載したるが如し。然るに同小學校長丸山松江氏より左の禮狀と受領書を得たり。

謹啓過る一日拂曉よりの暴風雨は遂に東京灣に大海嘯を起し未曾有の出水にて沿岸地方の被害は慘狀を極め申候。當村の如きは溺死者百四十七人行方不明五人を數へ申候内十七名の溺死者は實に本校兒童に有之候其他校舍は一部崩壊致

し校具類は悉く流失仕り候
其被害の餘りに激甚なるに小鴨等一同自失仕り
唯茫然と致し居候折柄早速御見舞を奉ふし其上
厚き御同情と御援助とに依り激勵被成下後始末
も漸く其緒に着き十月廿二日より兒童を召集し
授業開始の運びに至り候就ては急遽拜禮の上繰
々御禮申上ぐ可きの處不取敢御挨拶申上度如斯
に御座候 敬白
大正六年十一月六日
南葛飾郡砂村小學校長
丸山 松江

早稲田大學理事

内ヶ崎作三郎殿

追て貴大學々生諸彦に宜しく御傳言の程願
上候

受領書

一金拾八圓六拾貳錢也
但し早稲田大學々生より風水害兒童
學用品購入費として寄附されたる金
右之金額確に受領候也
大正六年十一月六日
砂村小學校長 丸山松江印
早稲田大學理事
内ヶ崎作三郎殿

故角谷啓三君弔慰金

報告

故角谷啓三君に對する講師及學生有志の義捐
金は左の金額に達したり依つて之を報告す。

總收入

一金百五十四圓七十六錢七厘也

內譯

一金拾圓也 高等豫科 A B C Y 組
一金六圓四十錢六厘也 同 D E 組

外の影響少なかるべき模様候に、如何相成候事やら現在境を接しながら更に要領を得ず候小弟亦戦争の側杖を喰ひ先は不得要領なる在外三年を略は経過いたし候そろ／＼引揚げの準備を致候願くば歸期後直に講義に取掛られ候 機來春二三月の交着横の豫定にて 英國より海路出發仕候斯くして一二月月静養の上四月の新學年より開講の事に致度左様御取計らひ置被下度候、過日平沼先生より圖書館の購入書籍に付御申越有之候、其後何の御返事も無之候に付一旦注文を撤回致置候大部の注文故無期限に注文の致し放しし不面目と存候 尙御注文の書籍も其後戦局の経過に依れば全部持歸る事或は不可能ともや相成、無已則ち定期刊行物だけなりと持歸る事とし、他は公使館へ預入るゝ事に致すやも知れず、但目今獨逸のマルク相場下落致居候へば買溜めしても猶ほ多大の利益ありと存候 此邊平御手數平沼先生へ御報知被下度願上候

研究の方も片端より始末つけ居候へ共 研究するに従ひて材料出來致し 到底調べ切れたる沙汰に御座なく轉々亡羊の歎有之候、依て按ずるに高い下宿料を支拂ひて一氣に讀過するよりも 材料を仕入れ歸朝後徐々玩得する方有效なるべしと存候 二三個月分の滞在費を材料仕入に充て、足許の明るい中逃出す事に致候、せめて法律科のセミナーに臨時間に合ふだけの材料を仕入れ度と存し 最小限度を取調べ候ひし處、それにても既に四五百フランに達し多少群易致居候英米人はケース、ローにて又歐洲人はローマ法にて 根本的に法律思想を鍛練致し眞に奇想百出の概あり、日本にはこれに匹敵すべき稽古臺なき爲め、思想に洗練を缺き出鱈目と相成る嫌ひあり。何と云ふ適當の方法なきやと折角考居候、ローマ法典の譯書(全七冊)を仕入れ候セミナーへ備付くる爲めに候 譯書にては氣が利かぬやうなれど今更ラテン語から稽古してゐるにも 日本には無用かと存候且原本は其出版有之候 何時にても購

入し得らるべく候へ共、この譯書は一八三〇年の出版にて今は骨董的に品少なく相成候 フリッツ氏パシテクテンなど思想の鍛練には 絶好の書物に御座候若し餘裕あらば仕入るべしと考居候 是亦絶版となりたる古本にても値廉ならず候 其仕入れ度は眞に汗牛充棟も音ならず候へ共 何分費用相許さぬ事には手も出不申候。例の經濟學者フキリツボツチ氏も過日逝去せられし由 埃國電報に相見え居候多分御承知の事には候はん、ルロアボリユー氏の逝去といひ 近來經濟學者の厄年と相見申候——但我天野先生は此限に在らず!

過日獨逸の掠奪免許船(Kaperboot)メーウエ號の活動振りを活動にて 拜見致候いかさま大船巨舶が水煙を立て或は横腹を出し或は煙よりシヤチ録立となりて 怒濤の裡に撃沈めらるゝ有様は壯絶などいふよりも 寧ろ凄惨の趣きあり戦争のいかに恐ろしきかを目の當り 感得仕候平和論に早變り致す譯には無之候へども 戦争も餘り綺麗には御座なく候日本のハドソン丸も一寸フヘルムに現はれ來り候、郵船宮崎丸も竟にやられ申候吉江君の御乗船なりし由、其感慨果して如何。片上、杉森兩君と小弟と同窓三人同じく 戰國時代に來合せ申候段全く以て奇遇に御座候。

(中略)

近來生活益々單調となり一向これぞといふ種も御座なく候 唯暇さへあれば森の中を駆すり廻る位に候故を以て益々強壯に相成り 在外三年御蔭を以て甚しき病氣にもならず相過し居候此分ならば先づ神經衰弱は心配に及ばぬ事と存候 内風呂は瓦斯代高價の爲め使用禁止と相成春頃は町へ銭湯に行き候 銭湯とは言へど同じく 一人貸切りに例の楕圓形の浴槽にて且浴後直に又洋服を着くる故 蒸殺されんばかりに相成、夏は全く閉口に候間此頃は入浴全廢致し居候かれこれ二ヶ月入浴致さず、毎朝冷水摩摺にて間に合はせ居候歸朝後は先づ 日本の湯澤

山の風呂に入り 晩茶で茶飯をいさ込み度と存居候 先は一寸近況御知らせ旁御依頼迄 如新に御座候也

六月十七日 中村 萬吉
藤田幹事殿

拜啓秋冷之候愈御清静奉欣賀候 扱而小生事積年の御教授に依り今日漸くドクトルフロツフイーの學位を授與致され候に付御安心被成下度先ははがきを以て不取敢御報迄申上候
千九百十七年十月八日
コロンビヤ大學 高橋 清 晋

早稲田大學幹事 前田 多 藏 様

定 價 壹部郵稅共 金拾錢
廣 告 料 一回一頁金貳拾圓半頁 金拾圓四分 一金五圓

●秋期校友大會休止

秋期校友大會は大隈總長御病氣後の御回復未だ充分ならざるに依り本年に限り休止の事となれり。

大正六年十一月十日印刷
大正六年十一月十日發行

編輯兼發行人 前田 多 藏
印刷者 渡邊 八太郎
印刷所 東京市牛込區櫻町七番地
日清印刷株式會社
府下豐多摩郡戸塚町字下戸塚六百四十七番地
發行所 早稲田大學 早稲田大學校友會

轉居 高田 早苗

本郷區駒込動坂町二二七番地
電話小石川八二六番

東京帝國大學文學部博士 上田萬年 東京高等師範學校教授 松井簡治 先生著

大日本國語辭典

內容見本進呈往復葉書申込次第

早稲田學報 (大正六年十一月)

二十年苦我國民は今日て始め國家の賜物我國民は今日て始め國家の大辭典を有せり

全部四卷 約五千頁 包明 明年十月完成
語數二十二萬 四六倍判 背革 角半 一千二百五十頁 插畫約四百 圓五拾錢

第三卷發行 特價金六圓 (金參圓宛二回)

第一卷現在數五百部限第二卷同上 一千部限此際特價金六圓にて高需に應ず

郵稅各卷廿四錢 臺灣四十五錢 鮮支五十五錢

苦心二十星霜、費用拾數萬金、著者と出版者、共に最善最良の努力に成功せるものは本書なり。昨大正四年の秋、第一卷の發行を告げ、萬口一致の推讃を蒙り、一舉學界最高位の王座を占め、昭代の明の光輝たる名譽を荷ひたり。尋で昨秋第二卷の發行して、噴々たる好評は中外に洽く、模範的大出版として、本書の信用は絶対に確立せり。今や公約期一日の違へずして第三卷を出だす。體裁品質前卷と寸分の差等なし。大辭典は、單に學者の抑々本書の如き標準的國語大辭典は、單に學者の專有物に非ず、一般國民の權威たり、全國各學校に於ける國家に於ける書齋の權威として、必ず先づ一本を備ふべきなり。國語教育の憑據として、必ず先づ一本を備ふべきなり。

權威的公評

我が國寶の大辭典
最初の國民的大辭典……時事新報
最進歩的の國語辭典……東京朝日
國語界永久の權威……高朝報
天下屈指の大偉觀……大阪朝日
空前の國語大辭典……太閤
……營業之日本

東京 富山房 日本橋 金港堂

振替五〇一 振替八八一五

內容に實充たしる二十二月の號の壯美

大學及學生

●本誌を讀まずして諸君は不安を感じざるや？

▽私學鬻憲論……主筆

▽醫科大學經營論……慶應義塾長 鎌田 榮吉

▽大學の爲の訓育法……橘 靜二

▽福原錄二郎論……ハルワート大學、スロツシ

▽教育會議批評……正木校長、某記者

▽官學と私學……瀨戸口軍樂長推讃の辭

▽特別記事……瀨戸口軍樂長(原色版)世界各大學巡禮(寫真版四頁)

▽特別記事……本年秋季に於ける野球、庭球、漕艇競技の高等批評

▽特別記事……本年秋季に於ける學者・教授・藝術家は何を爲せしや

▽特別記事……本年秋季に於ける新著の英米佛露の名著紹介

▽特別記事……本年秋季に於ける各大學、學會、研究所の消息

▽特別記事……ケラスコー 加茂博士 脚或夜の夢 吉井勇

▽特別記事……ウエルス大學(英文) 上代たの子 詩 劍橋とバイロン

▽特別記事……ドイツ音樂學校 山田耕作 小 秋晴 鈴木 悅

▽特別記事……イギリスの女子教育 安井哲子 脚 土地 秋田雨雀

▽特別記事……西洋の下宿と寄宿舎記者 本 土地 秋田雨雀

▽師範教育の根本義……東京女子 師範學校長 湯原元一

▽大學とメソドロジイ……大山郁夫

▽菊池男の學制意見を評す……次官 田所美治

發行所 東京赤坂區 丹後町五番地 進文館

電話東京二六一二〇番 電話區園芝七七一四七番

私立大學學號

早稻田學報 (大正六年十一月)

一八

■私學存在の根本義を論ず

□五大私立大學の過去現在未來

■五大私立大學の學風及社會的勢力

□早稻田大學の紛擾と同大學の三尊

▼實業界に於ける私立大學の勢力

▽私立大學出身の實業家月旦

▼私立大學出身の學者及政治家

▽地方に雄飛しつゝある私學出身人物

◎早大の紛擾と私立大學

◎早大紛擾の種々相

(最も公平嚴正なる立場より縱横に事實及人物の批判を爲す)

▽私立大學の功勞者と其功績

▼私立大學出身の特色人物

▽私立大學出身の名門富豪

▼私立大學の教授講師月旦

□早稻田大學の光明的將來

■五大私立大學の歴史及現在

□五大私立大學の主義及抱負

■早稻田大學問題に對する世評

男爵 瀧澤榮一

主筆 石川光人

主幹 加藤主税

磯邊彌一郎

記 者

記 者

記 者

記 者

新所文部次官
山波戸博
福本日南外數氏

記 者

記 者

記 者

記 者

覆面名士狹水漁郎

(田島明大學監分數氏)

(松室法相外數氏)

(當代名士十數氏)

社業實之代現

東京市東兩國

振替 東京 二一 二七 一番 本號 一部 廿錢 郵税 二錢

大正六年十一月十日(毎月一週十日發行)